

「子どもの仮装」といったのは三〇年あまり前で、「仮装」を試みた後藤竜二は、二〇一〇年に亡くなってしまった。二〇一五年の児童文学は、もうすっかり「子どもの仮装」という方法を身につけ、さらに、語りの革新にむかっている。

いとうみく『車夫』（小峰書店 一月）のジャケットには、浅草の雷門を背景に、まだ少年ともいえる男が人力車を引いている絵が描かれている。人力車にのっているのは、膝掛けをした少女だ（装画・田中寛志）。本をひらくと、最初の話「尾行にはむきません 悠木乃亜」を、この少女が語りはじめる。

「ガードレールに腰掛けて足下をにらんだ。

この春、買ったばかりのお気に入り。ラインストーンの入った五センチヒールのミュールが、にくたらしいくらいかわいく光ってる。」

一五歳の彼女は、ママが死んで七年たって、再婚するといいい出したパパが再婚の相手とデートするのを尾行している。パパたちが人力車で浅草の町をめぐるのをミュールの足で追いかけていたが、靴ずれをおこして、自分も別の人力車にのりこむ。

つぎの話「力車屋 吉瀬走」の語り手は、少女をのせた人力車の車夫である。事業に失敗した父が借金をのこして失踪し、やがて、母も出奔して、高校を中退した彼が車夫

になるまでが語られる。そして、彼に車夫になることをすすめた、高校の陸上部の先輩、前平俊平や、力車屋のおかみさん、神谷琳子が語る話がつづく。語りのオムニバスは、主人公である吉瀬走の現在を立体的に見せることになる。最後の第七話の語り手は、また、走自身で、車夫になつて一年たった今が語られる。

吉野万理子『赤の他人だったら、どんなによかったか』（講談社 六月）のジャケットの表には八条風雅が、裏には高橋聡子が描かれている（装画・pondoraga）。『赤の他人だったら、……』は、一人称の語りではないが、前半の視点人物を風雅がつとめ、後半は聡子だ。風雅は、友だちとふたり、危険をおかして、となりの市で起きた通り魔事件の犯人逮捕の瞬間を目撃する。聡子は、犯人のむすめで、前の中学校にいらなくなつて、風雅たちの学校に転校してくる。このオムニバスによって、物語の視野が広くなり、事件の背景も見えてくる。作品のおしまいは、犯人のむすめとして生きていかなければならない聡子の今後のことも見えてくるのだ。

おおぎやなぎ ちか『しゆるしゆるのばん』（福音館書店 一月）では、さらに重層的な語りを試みられた。この作品の語りも一人称ではないが、全一二章のタイトルは、第十章をのぞいて、その章の主人公にあたる人物の名前だ。半数以上のタイトルが「解人」だから、物語全体の主人公